

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520239

研究課題名（和文）ルネサンス期イングランドにおける文学と出版の研究

研究課題名（英文）Study of Relationship Between Literature and Publication in Early Modern England

研究代表者

篠崎 実 (SHINOZAKI MINORU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：40170881

研究成果の概要（和文）：ソネット集出版ブームによって叙情詩の印刷が一般化し、大衆劇場の隆盛とともに戯曲の出版が常態化し、劇作家、詩人の作品集の編纂がはじまったルネサンス期イングランドにおける、George Gascoigne、Sir Philip Sidney、Edmund Spenser、William Shakespeare、Ben Jonson らの叙情詩、戯曲、宮廷余興を分析し、それらは、作者が作品の公表様態を意識し、公表形態が創作内容に大きな影響を与えていることを示していることを観察した。

研究成果の概要（英文）：This study has shown lyrics, dramas, and court entertainments by George Gascoigne, Sir Philip Sidney, Edmund Spenser, William Shakespeare, and Ben Jonson created in the English Renaissance, in which lyrics came to published, playbooks became popular publications, and collected works of poets and dramatists began to be published, indicate how the mode of publication affected the authors' invention, who were keenly conscious about the media they chose.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英語・英語圏文学

キーワード：英文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年頃から新歴史主義の先駆的研究によってイギリス・ルネサンス期における文学作品の創作と発表という行為の社会的次元に光が当てられはじめた。

(2) 同じ頃から創作過程を浮かびあがらせる書誌学の新しい流れが生じた。

(3) 叙情詩の手稿研究という領域で重要な研究が相次ぎ、叙情詩の公表過程の変

化が創作に与えた影響を重視する新しい批評の誕生に刺激を与えてきた。

こうした個別領域でなされてきた研究によって可能性が示された、書誌学的知識の批評的読解への適用という新しい方法の刺激を受け、これを発展させ、文学ジャンルを横断するかたちで文学的創作という行為の社会的次元を浮き彫りにする新しい批評的読解の戦略を開拓する本研究を着想するにいたった。

## 2. 研究の目的

George GascoigneからBen Jonson、Shakespeareらにいたるルネサンス期の詩人や劇作家の詩や戯曲など作品の公表手段がどのような変遷をたどったか、そして作品は公表手段の特質をどう反映しているか、などといった問題を、具体的な手稿、印刷本雑録詩集、印刷本個人詩集、印刷本作品集、戯曲手稿、印刷本戯曲、印刷本戯曲集などの検討によって考察していく。

## 3. 研究の方法

海外図書館における版本調査と国内図書館におけるマイクロフィルム・コレクション利用による一次的な調査などの資料蒐集作業を進めながら、叙情詩、劇、宮廷エンターテインメントの各ジャンルについて作品の読解、刊本や手稿の検討を行ない、以下の点を考察する。

(1) 叙情詩に関して、Watson, *Hekatonpathia* の手稿から出版までのテキストの変容とソネット形式の英国への移入の関わり、Gascoigne, *A Hundreth Sundrie Flowres*の創作から出版にいたる複雑な過程の再精査、Sidney, *Astrophil and Stella*死後出版へのDaniel, Spenserの関わりと彼らの自作出版の関連などを検討し、16世紀末葉から17世紀に初頭における叙情詩の公表形態と創作内容の関連を考察する。

(2) 戯曲の編纂・出版のパイオニアであるBen Jonsonと自作の出版に無頓着だったShakespeareの戯曲テキストがどのような形でそれぞれの劇作家の創作行為の実態を反映しているかを、それぞれの創作スタイルを特徴的に示すような作品を例として考察する。

(3) Gascoigneらが関与したエリザベス朝時代の宮廷エンターテインメントとBen Jonsonらが制作したジェームズ朝宮廷仮面劇について、関連出版物の出版形態を考察し、宮廷エンターテインメントのテキストから、そうした出版物の出版意義や作者の出版や創作にたいする意識を考察する。

## 4. 研究成果

ルネサンス期イングランドの文学において大きな出来事は、大衆劇場の開設にともなう世界初の商業演劇文化の形成と1590年代における恋愛ソネット集出版の大ブーム、Ben Jonsonらによる個人作品集の集成であった。これらすべては、文学史上の重要な出来事であるとともに、文学作品の出版という観点から見ても重要な意味をもつものであった。商業劇場の隆盛は観劇記念となる芝居本の出版を喚起し、Jonson、Shakespeare、Beaumont and Fletcherの作品はのちに集成されて作品集あるいは全集として出版されることになる。Thomas Wyatt, Earl of Surreyら宮廷詩人の恋愛ソネットは詩人の生前には手稿回覧、あるいは手稿出版によって流通していたが、詩人の死後雑録詩集におさめられ印刷出版されていた。ところが、Sidneyの*Astrophil and Stella* (1591)の死後出版がきっかけとなり、職業詩人たちが恋愛ソネット集を出版するようになる。こうした時代の流れのなかでGascoigneやJonsonのように自作を集成して出版する詩人、劇作家が現われるようになり、それがシェイクスピア劇全

集の出版に道を拓くことになる

そうした時代における創作と作品公表の形態のあいだ関係を考察する本研究では、具体的には、このような大きな流れのなかで、Gascoigne、Sidney、Daniel、Spenser、Jonson、Shakespeareらが、どのように創作し、どのように自作を公表し、発表メディアの選択が作品の内容にどう関わるのか、あるいは作品の内容が発表メディアにたいする作者のどのような意識を反映しているのかなどといった問題を考察した。

その結果、本研究の成果は、当初の研究目的(1)から(3)に照応する三つの内容をもつ。

(1) Gascoigne から Shakespeare にいたる叙情詩の出版

(2) 大衆劇場で上演された劇の台本の出版

(3) 文学ジャンルとしては周縁的であるが、衆目を集める大きな行事であったために台本等の出版がともなった祝祭芸術関連の出版

以下がそれぞれの分野における研究成果の概要である。

(1) ①自作出版のパイオニアであるギヤスコインは、みずからの作品集 *Hundreth Sundrie Flowres* (1573)を雑録手稿が印刷されたものとの体裁を与えて出版し、こうした偽装工作が収録した詩の説明文が肥大化して小説のような趣を呈した‘The Adventure of Mr. F. J.’という歌物語を生みだした。こうした Gascoigne の創作についての研究から、手稿文化と印刷文化がオーバーラップする文化状況にたいする詩人の意識によって新たな文学ジャンルの創出が行なわれた、との知見がえられた。

②Sidney, *Astrophil and Stella* (1591)の出版を引き金とするソネット集出版ブームの

形成過程の考察からは、ジェントルマン階級の「印刷の汚辱」意識が強かった叙情詩出版の黎明期において、雑録詩集や追悼詩集という古い形態が、自作の恋愛詩の出版を望む Daniel、Spenserら職業詩人たちの隠れ蓑になって、個人詩集の出版という新しい形態の作品公表の契機となったことがわかった。

③ Jonson の死後出版の詩集 *The Underwood* と彼が自身で綿密に編纂して作品集におさめて出版した *The Forest* の比較からは、Gascoigne に次いで自作の集成、出版のパイオニアとなった彼にあっても、終世手稿文化との関わりはつきまとったこと、手稿文化と印刷文化のオーバーラップという現象は、論究対象としたなかで比較的遅い時期に属し、印刷文化への関与が顕著な Jonson にも見られることが示された。

④Shakespeare の詩に関する考察によって、曖昧さという彼の詩の特質が、彼の詩に頻出する隠された宝物の開示というテーマとともに、個人的な性愛の秘密の暴露を売り物とする恋愛詩集出版のストラテジーと不可分のものであるとの知見がえられた。ただし、この分野に関する知見は研究期間内に未発表。

(2) 大衆劇場で上演された劇のテキストに関しては次のような知見がえられた。

①大衆劇場の隆盛とともに、観劇記念のような用途のために芝居本が出版されるようになったと目されている。こうした芝居本は、劇団のもつ台本がなんらかのルートから出版者の手に渡り、著者の関与しないところで印刷・出版されていた。印刷に用いられたのは、劇団が所有していた作者による原稿であったり、劇団で作成した上演台本の複本などであったという。そのため、芝

居本は、印刷原稿の性質次第でさまざまな証拠能力をもつことになる。近年の研究で重要な知見は、Shakespeare のいわゆる「不良四つ折り本」の再評価である。長らく不良本のレッテルを貼られてきた *Hamlet* などの短い四つ折り本が、劇団による上演のための短縮作業を経た、上演由来の台本に由来するものと考えられるようになってきたのである。シェイクスピアのそれぞれ *Romeo and Juliet* と *Othello* の二つ折版全集所収のテキストと四つ折本の本文の比較を行なった。その結果、前者に関しては、四つ折本の本文が、劇作家が創作したテキストを上演前に上演可能なものとするための改変過程を示すものであることが観察された。一方、後者では四つ折本の本文は、劇作家が書いた劇の内容が（おそらく上演後）劇を改訂した俳優たちに影響を与えている可能性を示していた。このように戯曲の出版に無頓着だった Shakespeare の劇のテキストは、そのため劇場における共同的な創作の過程をとどめるものとなっていることがわかった。*Romeo and Juliet* についての論攷は日本英文学会の研究誌『英文学研究』に掲載され、*Othello* についての論攷は日本シェイクスピア協会の 50 周年記念論文集に掲載され、最新の研究成果として評価された。

② Jonson は、*Every Man Out of His Humour* では出版のための大々的な改訂を行ない、*Sejanus* では「第二の筆」による部分を消し去るなどして、第 1・二つ折り版 *Workes* の出版に結実する作品集成の営為を系統的につづけた。そうした編纂の痕跡がとくに顕著ではない *Catiline* に関して、キケローの演説を種本としてシセローの演説を中心とする劇を作りあげる過程の分析を行なった。それにより、彼の創作が

舞台での上演よりも書斎での読書にふさわしいテキストを作りあげていくさまが浮き彫りになった。こうして、Jonson に関しては、彼の創作法自体が自作の編纂・出版という作品公表のための営為と緊密な関係にあることが確認できた。この知見は、日本シェイクスピア学会で研究代表者がコーディネートしたセミナー『ジョンソン再読』の基調をなす報告として発表され、Jonson に関する最新の知見として評価された。

(3) 祝祭芸術に関しては、エリザベス 1 世時代の女王歓待余興とジェームズ 1 世時代の宮廷仮面劇について、どのような形でテキストが公表され、印刷・出版がどのような機能を果たすのか考察した。

① 宮廷祝祭は臣民の耳目を集める大きな行事であったため、その創作を委託されたものたちはその趣向をこぞって出版した。エリザベス在位中最大の歓待余興であったケニルワース・エンターテインメントでは、制作者たちが作ったすべての演し物をおさめた *Princely Pleasures at Kenilworth* と通称 Laneham's Letter という第三者による歓待行事全体の目撃記録が出版されている。この 2 冊の分析によって、君主歓待行事のテキストの出版が、政治的問題をめぐる争いの場となることが観察された。

② 時代がくだり、ジェームズ 1 世時代となると、毎年クリスマス・シーズンの閉幕を飾る、ホワイトホール宴会殿で上演される十二夜の仮面劇が最大の祝祭行事となり、大衆劇場より格式の高い創作の場を求める Jonson は宮廷仮面劇の制作に心血を注ぐようになる。Jonson 初期の *Masque of Blackness* の創作経緯の再構成と出版された手稿と印刷本テキストの比較から、作者 Jonson の、主催者たる王妃や王子と、さらにその背後にいる国王とのあいだの、作品

の統御や所有をめぐる権威争いの痕跡が刻みこまれていることが観察された。この仮面劇の印刷本には、国王の2王国連合にたいする批判を隠蔽する身振りが見られ、ジョンソンが出版に自身と特定の読者だけの特権的な読みの空間を作ったことが示されている。

こうして、宮廷エンターテインメントの印刷・出版の考察によって、その種の出版は、ときには現実的な政争や著者と君主のあいだの権威争いの場となっていたという知見がえられた。宮廷エンターテインメントに関するこうした知見は、日本シェイクスピア協会の会報における宮廷祝祭特集の論攷として掲載され、最新の知見として評価を受けた。

本研究において、このように近代初期イングランドにあって、叙情詩の出版は手稿文化と印刷文化のオーヴァーラップする状況のもとで行なわれるようになり、そうした文化状況がノヴェッラと歌物語の交雑的な新しいジャンルや詩における曖昧さなど創作された作品の文学的特性を生みだしたこと、劇作品の出版においては印刷されたテキストは予想を上回る多様性をもって劇場で進行していた創作作業の実態を伝えるものであること、宮廷祝祭のテキストはなまなましいかたちで著者の関与した、ときには政治的な、ときには文学的な戦いのばであったこと、などの知見をえることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 篠崎 実、エチオピア人の肌を白く、*Shakespeare News*、査読有、51巻1号、2011、25-34頁
- ② 篠崎 実、*Romeo and Juliet* における劇場の詩学、*英文学研究*、査読有、87号、2010、1-16

[学会発表] (計2件)

- ① 篠崎 実、マクベスはいかにして王位篡奪者となるか、第50日本シェイクスピア学会、2011年10月22日、聖心女子大学
- ② 篠崎 実、岩田美喜、横田保恵、末廣幹、ベン・ジョンソン再読、第51回日本シェイクスピア学会、2012年10月14日、秋田大学

[図書] (計1件)

- ① 篠崎 実ほか11名、2番目、*シェイクスピアと演劇文化*、研究社、2012、244(25-42)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

篠崎 実 (SHINOZAKI MINORU)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：21520239

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

